

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	音なき響：文苑
Author(s)	内田，夕闇
Citation	龍南會雜誌， 1 0 8： 2 9 - 3 9
Issue date	1904-11-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5740
Right	

文苑

音なき響

内田夕闇

大宇宙をつゝみたほせたる一碧の天幕のあなた、啓示の白光ほのかにすきて見ゆ。そはひんがしのかたなり。廣野の最中にさまよひ出でたる友と吾とは、けふうつくしき樂のしらべを流して、秋の花野にあらたの靈をさまさんとするなりき。

『友よ、いかに清らけきあしたならずや、われは胸深く水晶の玉あまた秘めたらむごとき心地するぞ。』

『さなり、君よさらばかしこ小川の岸なる草にいねずや。われはさゝやかなる水のひゞきに合せてわが樂を奏でむに』

井オリネをとりて、つと花野に立ちたる友の姿のいかにいみじきよ。そがはりある明眸、げに西の國なる大音樂堂の中に立ちて、唳々の音をかなでつる美しき人のそれにも似たりや。紅の頬、そこに奏樂の力はこもらずや。

絃はふるひぬ。あしたの靜寂こゝに破られて、ねむりより醒めゆく世の影、たゞ新たなる生命をみ

なまじらせつ。

雲路をかける白鳩に

たもひをはるかのせて行け
しらべしづかに野もせに波うちて、静冷の大氣こゝに相ふれ、ささやかなる夕べの波のひびきの如
きをたゞへつ。其間にまじる美しき歌聲、さながらに、天と地との間に積み上げたる、見わたる玉
のかす／＼相うちたらむごとし。

天の匂ひにそと入りて

白きもすそにふれも見ば……………

餘韻長う地にひきて、うれしみの情わが胸にあふれたり。樂はすすみぬ。

さかしき胸の荒波も

光にとけて流れなむ。

絃のひびきに云ひがたき樂の力はみなぎりぬ。見すや、ひんがしの方、天幕やぶれて今ぞ美しき彩
はならむとす。そは大龍嘯いて玉の光を吹きあげたらむとく、こりなす紫紅の氣、柔かく、さは
れ力づよく、くもりたらむとく、さはれ華やかに、濃紫の酒をみてたる水晶の堂か、さらずは装
ほひこらしたる天女の彩衣にも似たりや。

『野ははねにはねたり。友よ、いかにふさはしきひびきなるぞ、わが胸わな／＼にあらすや、
たゞ、たねなることよ。』

友はたゞほゝるみぬ。露れもき野の花は黙してかうべをふるのみ。花精にあしたの舞はなきや。樂は今終らむとす。絃の高鳴り、わきわく新潮のひゞきをこよまして、天と地との光を呼ぶ。

虹よひとたび野に下れ

光の堂のきざしに

詩歌の巻を高よみて

とこしへの花咲かすべし

奏で終へたる一曲、そは『光の歌』なり。絃のひゞきやうにたさまれば、搖曳の音すゞやかにあしたの歡樂をのせて、はるかに遠く流れゆき、はては若葉のさゝやぎのごとく、ふと消えうせてあとにはたゞひゞきなき浪のゆらぎのごときを覺ゆ。かなた彩雲の上、若尼の息こらして行く春の花びらを見つむらむやうなる日神の先驅、まなざし清き晨星は、たのがつとめを終へて、いさゝかのなやみなく、靜平さはまりなき蒼々の大虚にしづみはてぬ。そを聖者のねはりにたどへむはあまりにやさし。青葉がくれの鳩のひとみか、さては美しき少女の、初戀のうれしみをかくさんどて、緑の被衣に顔を蔽ひたるそれども。

われはなほ耳朵にさゝやかなる響の残れるが如き心地して友を仰ぎぬ。友は靜かに立てりき。あゝ雄揮と精緻とを兼ねたる天の巨王が、いみじき鑿の匂ひをとめたるこの大宇宙に立ちて、ひたすらに藝術の神を追へる友の姿のいかに神々しきよ。そが足もとなる金色の樂譜、風にひるがへり、彩雲に照り、燦たる光、目もあやなり。友はしづかに井ノ口を草に横へて歩をこなたにうつしぬ。

小川のひびき、いまさらの如く我等の耳をうちて、夢幻の境をやぶるなりき。

五とせ月は流れぬ。友と吾とはこの美しかりし昔をしのびて、再び秋のあしたを同じ花野にさまよふなりき。

* * * *

『友よ、いつとせの間に君が樂譜にたさめ得たるしらべは何々ぞ長き月日を他郷にさすらひし我は、常に君が樂譜のゆたかならむ事を祈りき』

『たゞ情ある友よ、許さずや、われはたゞ音なき響の一曲を得つるのみぞ。』

『音なき響とや、いかにゆかしき名なるぞ。さらばかなですや』

『あらず、そはつたなき作なり。このあしたには光の歌こそふさはしけれ』

『いな、いな、われは君が新しき作をこそきかむと願ふなれ。ましてその一曲は音なく消ゆる晨星の響をこめたるものにはあらじか。われはそのゆかしき名を忘るゝ能はじ。たゞ速かにかなですや』

『幸ある君よ、君はそを美しきものに解さぬ。さはれては悲しきひびきのものぞ』

『われは悲しきひびきを厭はじ、たゞかなですや。』

『あらず、そはわが深き胸の憂ひをつゝみしものなり。われはそを奏づるにたへじ』

『深きうれひとや、たゞそは故あらむ。語りてわれにそをわかたずや』

『われはそを忘れむとこそ願ひしなれ、いかで語らむ。君よ、この一曲につきては、早や何事をも問ふ勿れ、たゞ美しき光の歌をこそ奏づけられ』

『さはれ詩の神は美しき響をのみはめでじ、悲しきひびき、そもまた詩にあらずや。ましてや君は、そを奏でむとてこそ、ものせしならむに』

『さなり。われはまことわが悲みを忘れむすがにもとてそをつくりぬ。さはれ、われながらそが深きするどきひびきにうたれて、憂ひはいよくつのるばかりぞ』

『さらば物語のみにても』

『友よ、許さずや、われは何事をも告ぐる能はじ。なれざる鋤をとりてすらそを忘れむとせし我的心を思はずや。』

『鋤をとりしとや、そもいかなれば』

『さなり、せめてもの慰めにとてものせし音なき響の一曲がはしなくも悲みをますの料となりて、もろくもうち破られしわれは、終に作譜をたちぬ。かくて落莫の月日は、われをかけりて村の若者と共に鄙歌を歌ふべき身となせしなり』

『さらば奏樂をも止めしにや』

『いな、われは夕べに井オリネを奏づることをやめじ。さればこそけふこゝにそを携へしなれ。さはれ、わが奏づるは皆五とせ前の美しき面白き譜のみぞ。かくても君はわれにかの一曲を強ひんとするか』

われはたゞ黙しぬ。友は終にそを奏でざりき。またいさゝかも彼が憂はしき物語をもらすことなかりき。

あけゆく天地、美しかりしにし目の影をたゞへたり。きはれ静寂の大氣はひびきを秘めたる悲みの色を示し、消ゆ行く星影は、はかなき終りの吐息をもらすごとくなりき。たゞ野にあまねき草の花、けふしも何のたごりぞ、悲みと憂ひとをかくさんとのわびしき榮か、いかなればかく力なき、いかなればかく淋しげなる。かなた彩多きあしたの雲、そはさながらに濃き重き憂をつゝめる夕潮のそれにも似たり。

友はたながたき面をたれて、ふたゞび囁くが如く云ひぬ。

『われを信なき友と云ふ勿れ、わが何事も語らざるはたゞ苦しきが故ぞ、たへがたき胸なる浪を、強ひて窺はむは、情ある友の心にあらじ』

憂愁の雲友が眉のあたりを蔽ふにあらずやわれはわたへで叫びぬ。

『たゞ友よ、わろかりし、この美しきあしたを歡樂のしらべに酔はむとてこそ來つるものを。さはれわれは君が歴史にかばかりの悲しき刻みあらむとはさぞらざりしよ。たゞ歡びを歌ふ伶人とのみ思ひつるを……たゞ許さずや……友よ……なご沈める……見よ、あしたの光野にあふるゝにあらずや。寺々の鐘は今にも野づらにひびくべきぞ。いざこの廣野にみなぎらしむべき美しの一曲をかなですや』

友はしいてさびしげなる微笑をもらしつゝ野に立ちぬ。

『さらば光の歌を』

絃はふるひぬ。歌聲はひびきぬ。さはれそはいにし日のそれにあらざりき。くれゆく秋の夕べ、やれはてし古城の石吹くするごき風の響のごと、すややかにゆたかなるべきこの一曲にすら、彼が胸のひびきはつたへらるゝにあらすや。さても憂ひとは何事ぞ悲しみとは何事ぞあゝときがたき『音なきひびき』なるかな。

われは云ひしらす友の身の上にあはれを催ふして何とはなしに頭を地にたれたるとき、友は未だ光の歌のなかばにも至らずて、ふと其が樂の手をやめぬ。われはあやしみて問ひぬ。

『いかにせしぞ』

『たゞけふのひびきふし、君にもたへがたき悲しみのひびきをつたへつらん。われは君がまなざしにてそを知れり。樂しかるべき光の歌を、かくまでもかなしく奏でしわれの、いかにほかなきを思はずや。けふは心地はれやかならず。君よ、またこむあすに、ふたゝびこゝに來れ、われは君をよろこばすべき響をつたへむ』

『友よ。わがために感興をそこねしにあらずや』

『あらず。そは君の罪にあらず。わが胸常に音なきひびきを忘れざるが故ぞ。それよ、われは樂譜のうちよりかの一曲を省き去らむ。』

彼はいそぎで樂譜をとりぬ。あなや、美しき金色のページは今さかれむとす。われはたゞるきてそをこばみぬ。

『友よ、いかにするぞ、』

『たゞ止めてあれ。美神もしろしめさむ。とこしへ悲愁の記念を残すべき一曲の樂譜、いま裂きてすてむに』

『さあれ、いかに惜しきことならずや。その一曲に君が力はこもらじや』

『さなり、われの最も力をこめしはこの一曲なり。されど、そはまた我が命と血潮とを奪ふものぞ』

『たゞわれにそを與へずや』

『あらず、かくても我が心ははれざるべし』

『われはたゞそを秘むべきに』

『そは秘むべきにあらず。たゞやり捨つべきものぞ。この一曲が、われと同じき運命きだめの人に歌はれむは、いかに心苦しきことならずや。』

『いな、いな、そは君がほまれぞ』

『ほまれとや。われはかゝる名譽ほまれを願はじ。たゞわれをしてそを棄てしめよ』

『さらば、せめてもの願に、今宵までわれにそをあたへずや。かくてその悲しきしらべを味ひ君が心を泣むを得ば、わが心足りぬべし。われは君が心にしたがひ、今宵もかひてそを焼きてすてむに』

友はしばしをたゆたひつゝ、やがて答へぬ。

『たゞ今宵とや、それよ、われはこの一曲に今宵までの命をあたへむ。さはれ誓ひを忘れむは友

の道にあらじ』

彼は、かく云ひつゝしづかにそが樂譜をわれに渡すなりき。

かくて我等は野を辿りて家路を急ぎぬ。棚びく雲をやぶらむとして破り得ざる日神の光に天地の榮、今を盛りなり。さあれ力なきは友の姿なるかな。いにし日のあさあけ、われはたゞ神々しき姿こそそ見つるものを、なご命なき枯木の様とは變りつる。朝の鐘鳴りぬ。なやみなき野の寺の鐘つき男が、力をこめし一杵の檀木は、いみじき靈の緒琴にふれて、野づらに遠く殷々の響をみなぎらしめつ。友はなほ力なき歩みをつゞけぬ。無言は二人の間に底ふかきしづけさをたゞへたり。けふ美しき花野のちもて、たゞ聲高きよろこびをさゝめきてもあるべきに、なごや、北の方闇長き氷の海にも似たる冷けき沈黙しんもくをや現せし。やがては小春の陽炎にけぶらむかの寺の、梵語の銘あるひびき勇ましき巨鐘の一吼にも、悲しき醒めがたき友の胸、さても何をかつゝめる。たゞ、『音なきひびき』そをひらき見むとき、闇の衣をまとへるあやしの幻影は、そこに残りなく消えさるべきにや。風にみだるゝ別れ路の銀杏葉、微音かすかに、眠れる野の石の精をさまして秋の歌あり。

たへがたき日の夕べとなりぬ。あしたの歡樂はやぶれて、一日を友が『音なき響』の低唱にくらせし我は、野に遠く刻まれて立つ墓石の冷たきをたばわつゝ、見るとはなしに眺めやるちぎれ雲、解きがたき一曲を解かんとつとむる我をなやまして、うすき日影を蔽ひゆく。さうしてつとむる戀と云はず、死と云はず、たゞ音なき胸のひびきそのみ歌へるこの一曲、いくたび誦ずしてもげにと

文

きがたき響なるかな。われは詩を知らず、譜を解せず、さはれ木の葉吹く風のひびきに合せてそを歌ひしとき、ある時は沈める沼の氣のごとく、ある時は枯木をくだく夕霜のそれにもくらべつべき悲しさを覺わたりき。

星の光を失ひて

つめたく立てる巖かな

音なき響胸にひめ

さわがぬ姿まなべとや

闇にもだねぬ子もあらば

よすがら汝^{なれ}を抱かむに

末節の數句、譜と共に、さながら雨を交へて巖をさざむ潮風のひびきにも似たらずや。

日はまたく沈みはてふ、しばしを力なき夕ばねの色、まがきの枳にうすき光をたゞよはせつ。今や『音なき響』を焼くべき時とはなりぬ。さはれ、わかき男の子が力をとめて歌ひ出でたる胸なる浪、そはたへがたき悲哀のひびきをつたへつらむ、なごか世に残すにたへじとせむ。ウエルテルのうらみ、ミゼラブルのかなしみ、げに藝術の堂に捧ぐべきいみじき筆の匂ひならずや。詩と樂とに命を得て、野に住めるわがわかき友は、いかなれば後の世の愛誦をこばみて、どこしへにそが響き

苑

をたゞむどはする。それよ、われはひそかにそを秘めて友を欺かむか。あらず、われを信じたる友は、わがために心の苦しみをたさへて、その一曲に今宵までの命をあたへしにあらずや。

力なくも庭に下り立ちたるわれは、ほろびをさゝやぐ落葉枯木をかきあつめぬ。ミューズの神もみそなはせ、今この一曲をやかむとするは、世にたゞ一人なる友の命を購はむがためぞ。

夕べの光消ねはてゝ、音なく上りゆく烟の末、見つるはうすき夕づゝのかげ。いくたびかたゆたひ持つ金色の樂譜のたもて、闇にまじりてさびしげの光をはなちぬ。

(完)

(卅七年十一月六日稿)

新 體 詩

斷雲厲風歌

蚪龍一度雲を得て天溟高く嘯けば

山川ために震動し風雨自然に起る也

天馬一たび翼得て自在の空に飛躍せば

力無窮のはてに落ち万象ために搖ゆぎなむ

夕

陽